

氏名（本籍）	チョ ヒョンス 曹 賢 洙 [大韓民国]
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 97 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 35 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	胡銅の総合研究－韓国伝統的金工素材の現代的可能性－
論文審査委員	主 査 教 授 若 山 裕 昭 副 査 教 授 大 井 健 二 副 査 教 授 関 村 誠

## 論文内容の要旨

韓国は昔から金属食器を使って独特の食事文化を伝えている。しかし、材料的特性と時代的变化によって金属食器の使用と発展がしばらく阻害された。また、今では、無形文化財に指定された数人の技術保有者によって、やっと命脈が維持されているのが実情である。それで伝統文化の継承と現代化を認識し、単純に伝えられている伝統文化を現代産業社会の構造に組み入れ、私たちの真の文化として新しく創出されなければならないと考える。

本研究では金属食器の素材である胡銅の材料的実験と製作技法の分析を通じて新しい成形方法を検討し、現在のすぐれた金属工芸技法と先端技術の融合を企て、新しい胡銅器の可能性を探求するための基礎的な方法論を重点的に研究した。

韓国の伝統金属食器は胡銅という素材で作る。胡銅は自然に出土される純金属ではなく、銅 78%と錫 22%の 2 元合金である。

鎚打ちによる成型に耐えられる適度な柔らかさと強度、そして、金製品に似た美しい光沢を得ることができる。最近、韓国の保健環境研究院及び大学の研究所などで抗菌効果とミネラル生成試験を通じてガラス、セラミックス、ステンレス、プラスチック容器に比べ、すぐれた抗菌効果を持っている上に、微量のミネラルが生成される長所があると報告されている。しかし今の合金の割合では材料の特性上、熱間状態でしか鍛造加工ができない。また、仕上げの段階で旋盤機械に固定して回転させて削り出すため左右対称の円形に近い形態しか作られない。表面飾りもほとんどないという短所がある。

西洋文化の流入により、ステンレス、プラスチックなどの素材に生活用具が変わっていく過程の中で、現存する国内の胡銅器工場で作られる食器は、過去の伝統的な形から脱却できず、伝統のデザインを踏襲したものがほとんどである。そ

のため、現代の食文化や生活様式に適合しておらず、製作手法もまた、昔の単純な手法に依存しているのが実情である。以上のような状況から胡銅器の需要は減少し、開発意欲も低化していくに至ったと思われる。したがって本研究は胡銅の研究と実験を通じて新しい材料の開発、現代の金属加工技術、デザインの領域を考察することで胡銅の現代社会の中で生きていく可能性を探る。そして韓国の伝統技術を絶やすことなく、発展をさせてゆくことを目的とする。

研究の範囲は大きく三つに分けて論じる。まず、韓国の金属食器文化の理論的背景を調査した。次に胡銅の持つ効能はそのまま維持しながら冷間状態で鍛造成形を可能にするため胡銅及び合金材料の基本性質を調査し新たな素材を研究した。最後に金属工芸の多様な技法を応用して新たなデザインの可能性を提示する。

研究の方法は先行研究と胡銅博物館及び工場を見学して重要文化財に指定された技術保有者をインタビューし金属食器文化の理論的背景及び素材の特性等を調査した。そして実際合金実験を行なって新たな合金材料を研究しさらに専門研究機関に依頼し胡銅素材の抗菌効果について確認した。最後に新たなデザインの可能性について現在の時点でどんな方向で発展できるかを考察した。

今までの研究としてはまず、理論的背景ではまず、胡銅は5世紀頃ペルシャに由来して、インド、中国に伝播し、韓国にその技術が伝わったといわれている。韓国ではその由来が三国時代からと伝わって来ている。新羅時代と朝鮮時代には鉄鑪典と京工匠、外工匠という国家機関を置いて一番活発に使われた。

日本の正倉院にも胡銅器が所蔵されている。これは新羅時代の時伝わって韓国では鑪器と呼ばれていた。日本では新羅のどんぶり(サバル)という器の形態を表す呼称が材質を意味する胡銅を表す呼称として定着したと記録されている。

韓国の食事文化の大きい特徴は見た目を重視する日本の膳立てとは違い、食べ物に技巧をこらさず素朴で食べ物の量を多く盛る。身分によって膳立てを水刺床、進止床、飯床で区分して呼び、おかずの数により3貼(チョプ：日本語では“品”の意味)から12貼(チョプ)までの膳立てがあった。そして食器の形によって合(ハップ)、蓮葉(ヨンイップ)、옥바리(オクバリ)、오목(オモク)という食器で分類される。

次に新しいデザインの可能性についてはまず、昔から今まで胡銅器の製造において発展があまりなかった理由について材料的側面と時代的側面で分けて調査した。材料的側面では胡銅合金は熱間状態しか鍛造加工ができないし冷間状態では硬質化し、鍛造加工及び手工具による表面華飾は容易くない。そして、材料の特性上、毎度熱処理をしなければならない煩わしさと機械の自動化設備の不足などが大きく作用していると考えられる。時代的側面では36年間の日本の植民地化、第2次世界大戦による強制的武器材料の供出、韓国の南北戦争による空白が胡銅器の製造と開発に大きい影響を及ぼしたと考えられる。そして山林法が改正され、産業の発達により一般家庭の燃料が木から煉炭に変わることによって煉炭の亜硫酸ガスによる胡銅器の変色とステンレスとプラスチック製品の流入で胡

銅器の使用が以前のように大衆的ではなくなり、命脈だけ維持するにとどまると見られる。

最後に新しい合金では既存胡銅素材が持つ短所を把握し展性と延性が豊かな銀を微量添加して三元合金による新たな素材について試みた。その結果、既存胡銅が持つ殺菌効果が同じく証明された。鍛金技法による小さな器物においては作業が可能だったが、大きい器物を作るにはある程度の限界があった。それで形態の変化よりは実験で得た漆の焼き付け塗装技法を応用して多様な色彩と文様表現によって新しいデザインの変化を試みようとしている。また、新たな素材が金属食器として実際に使用可能なのかを試す金属容器溶出試験で不純物が検出されなかった。

結論では日常の生活から離れていった感のある胡銅食器ではあるが、用途や形による金属素材の開発により、現在一般的に流通している素材と並んで、再び食器材料として復興させ、胡銅器の現代化に貢献し、韓国の伝統技術を絶やすことなく継承して、発展してゆくことを期待する。

## 論文審査の結果の要旨

曹賢洙は後期博士課程において韓国の「胡銅（サハリ）」を研究テーマに作品制作及び論文執筆に取り組んできた。作品制作では、韓国の食文化を勘案しながら「胡銅」の加飾の研究を重ね、彫金技法の彫りと漆の融合した金属漆器の技法を新たに編み出し、それを発展させた金属漆器の表現技法をさらに研究することになった。博士展において、「胡銅漆器」として展示された作品群は「胡銅」の新しい方向性を示した完成度の高い作品群であった。

博士論文では、「胡銅」の歴史、素材、韓国の食文化等に関して膨大な資料を基に詳細な調査を行い、研究成果としてまとめている。さらには「胡銅」の素材、加工法等の研究や新たなデザインに関しても記してあるなど内容のある論文である。

結論として作品・論文とも優秀と認め、博士学位の審査結果は合格とした。